

Aldous Huxley における悲劇と諷刺

桑 原 加 代 子

Aldous Huxley の作品の特徴は、彼の示す皮肉と諧謔にあふれた鋭い諷刺にあるとい
うのが、ほとんどの批評家の一致した意見である。⁽¹⁾では何故同じように皮肉、諷刺を含ん
でいる Sophocles の *King Oedipus* や、Shakespeare の *Othello*, *Macbeth* 等は、諷
刺作品ではなく悲劇作品と呼ばれているのであろうか。例えば、自らの出生の秘密を知り
両目に刃を突き立てた Oedipus や、愛妻 Desdemona を自らの手にかけ、犯した過ちに
気づき自殺した Othello、あるいは、魔女の予言が全て二枚舌の罠であったことを知り非
業の死を遂げた Macbeth に接した時、読者は Oedipus, Othello, Macbeth らを悲劇
の英雄とみなしその作品が偉大な悲劇作品であると感じるのである。Oedipus, Macbeth,
Othello といった英雄たちは、苦悩と死というのっぴきならない状況に直面し苛酷な運命
と力の及ぶ限り戦っているのである。一方、Huxley の描く人物の中にも苦しみ、絶望し、
ついには自ら命を絶ち、英雄らしく振舞っているものがある。しかしながら、彼らは読者
の目には悲劇の英雄とは写らず、その作品に対しても悲劇作品という評価は下されてい
ない。そこで、本稿では Huxley の諷刺の筆が極めて辛辣であると一般的に言われている
初期の短編 “Sir Hercules”⁽²⁾ (1921) 及び、未来小説 *Brave New World* (1937) の二作
品を取り上げ、一見悲劇の英雄のように見える登場人物の行動、言葉に焦点をおいて、
Huxley の作品が何故悲劇作品ではなく諷刺作品と呼ばれているのかを分析していくこと
にする。

最初に取り上げるのは、極めて短い Huxley が諷刺作家として第一歩を踏み出した
と高く評価されている⁽³⁾ “Sir Hercules” である。貴族として申し分のない教養を身につけ、
あくまで英雄らしく振舞おうとするこの物語の主人公 Sir Hercules を、Huxley は悲劇
の英雄として扱っていない。

まず、Hercules (ハーキュリーズ)⁽⁴⁾ という名前のつけ方に注目する必要がある。“Sir
Hercules” は、身長わずか 3 フィート 4 インチ足らずの侏儒に生まれた一人の貴族の物語
である。この侏儒に、Huxley は、ギリシア神話最大の英雄 Hercules (ヘラクレス) の
名をつけている。⁽⁵⁾そして、ハーキュリーズが英雄ヘラクレスとは似ても似つかぬ体形の持
ち主である事を、常に読者に印象づける事を Huxley は、決して忘れてはいない。例え
ば、“abortion” (C-Y, p. 67), “deformity” (C-Y, p. 70) という侏儒を暗示する言葉か
⁽⁶⁾

ら “pygmy” (C-Y, p. 67), “dwarf” (C-Y, p. 68) といった直接的なものまで様々な言い方で、ハーキュリーズを形容したり、あるいは、“smallness of his hands” (C-Y, p. 68) とハーキュリーズの体形を皮肉な調子で描いている⁽⁷⁾。このように、「ハーキュリーズ」という名前に、Huxley の主人公に対する扱い方が端的に示されていると言えよう。ハーキュリーズは、Huxley にとって揶揄の対象なのである。

先に述べた「ハーキュリーズ」という名前のつけ方に劣らず、ハーキュリーズが諷刺の対象になっている事を示すある出来事が、彼の身に起こるのである。それは、息子 Ferdinando が連れ帰った獰猛なマスティフ犬が、妻に危害を加えようとした事件である。ハーキュリーズは、妻に襲いかかった犬を相手に戦い、間一髪のところをやっつけている。

. . . Sir Hercules drawn his sword and stabbed the animal to the heart
So awe-inspiring was the spectacle of Sir Hercules standing with one foot on the carcass of the gigantic dog, his sword drawn and still bloody, so commanding were his voice, his gestures, and the expression of his face, that Ferdinando slunk out of the room in terror . . . (C-Y, p. 74)

読者は、この引用した場面から次の二点に気付く。まず第一に、このハーキュリーズの犬相手の戦いは英雄ヘラクレスの有名なライオン退治の逸話を思い出させ、さらにその様子は、ヘラクレスの勇敢な戦いぶりを連想させる。第二は、ハーキュリーズが召使いを始め家の中の家具その他一切を、自分のサイズに合わせて作り直していたということである。この事から、恐らく犬を相手に彼が使った剣も、彼の体に合った寸法であったと判断しても差しつかえないであろう。以上の二点を念頭に入れて今一度その光景を頭に描く時、ハーキュリーズの戦いぶりは果して読者の目にヘラクレスのように勇敢に写るであろうか。猛犬とはいえ犬をやっつけたハーキュリーズと、ライオンを退治したヘラクレスとの間には雲泥の差があることは否定できない。そして、その戦闘ぶりも侏儒が必死になって剣を振り回し、息をはずませながら、やっとの思いで犬をしとめたという印象が強く、意気揚々と犬の上に立っているその姿は、勇者の姿とは言い難く、滑稽さが前面に押し出され笑い⁽⁸⁾を禁じ得ないのである。この場面は、ヘラクレスを暗示する巧みな対照によって、ハーキュリーズの滑稽さがより一層際立つという効果を果たしていると言えよう。

次に、Huxley はハーキュリーズの肉体的欠陥、即ち侏儒という姿が、ハーキュリーズにとって唯一最大の弱点であることを暴露している。ハーキュリーズは、肉体的には小さいがその分だけ精神活動においては普通の人間よりも優れている、とひそかに自負している。そして実際、文学に精通し音楽を愛し詩作にも長じるといった、いわゆる貴族としての教養を十分に身につけている。従って彼は、自分にふさわしい女性は、美人でその上家

Aldous Huxley における悲劇と諷刺

柄も良くという長所をもってなければならぬと考えているのである。しかし、ハーキュリーズの思い通りにはいかないという事を、Huxley は見抜いている。例えば、ハーキュリーズにはその容姿が原因で、ある女性から冷たくあしらわれたという過去がある。ハーキュリーズにとって屈辱ともいえるその出来事を Huxley は、鋭く諷刺している。

. . . his deformity had been a source of the most bitter humiliation, for, having once dared to declare himself to a young lady of his choice, he had been received with laughter. On his persisting, she had picked him up and shaken him like an importunate child, telling him to run away and plague her no more. (C-Y, p. 70)

あるいは、ハーキュリーズの結婚相手として紹介された娘たちを、今度は反対に、ハーキュリーズが彼女たちの容貌や容姿を理由にして難色を示し、断ったいきさつを述べ、ハーキュリーズの身の程知らずさを、暗に批難しているのである。ハーキュリーズの奇形は、一生彼につきまとい消すことのできないものである事を、Huxley は明確にしていると言える。

さてここで、その肌の色を揶揄の対象にされている Othello の場合を考えるのは不適當ではないと思われる。彼の肌の色に関しては次の事が一応考えられる。黒人という言葉の響きには、どこか元は奴隷で後に解放されたものという感があるが、ムーア人 Othello の場合は、現代の我々の眼に写る黒人（ニグロ）とはかなり意味合いが異っている。従って、現代のニグロとの同一視は早計である。とはいえ、Othello と白人女性の組合せという設定、及び Iago が Othello の事を、“black rum”, “black Othello”⁽⁹⁾ と揶揄している事を無視する訳にはいかないように思われる。Othello という男は、若い時から戦いに明け暮れ手柄を立てることしか頭にない、決断と実行を尊ぶ武人としての資質を十分に備えた武将である。その Othello の堂々とした武人ぶりは、たとえ Iago によって揶揄され、淫らなイメージで語られようとも、読者に彼の肌の色をすっかり忘れさせてしまうのである。Othello の肌が黒いのは紛れもない事実であるが、それを越えるだけの尊厳さ、偉大さを Othello が有している事もまた事実である。一方ハーキュリーズに対しては、Huxley は既に述べたように、その肉体上の欠陥を打ち消すだけのものは何一つ与えてはいない。むしろその弱点を暴露していると言える。

一時は絶望かとも思われた結婚に関して、やっとの思いで自分の身分にみあった侏儒の女性を見つけ、平穏で幸せな結婚生活を送っていたハーキュリーズに、苦悩の影がさし始めるのである。それは二人の間に出来た子供 Ferdinando が普通の人間の大きさになりそうな気配を示した時からである。まず、3才の誕生日を迎えた息子が、その身長におい

て母を凌ぎ父にわずか 2 インチと迫った時、ハーキュリーズは日記に “Ferdinando is not one of us” (C-Y, p. 73) と記録し、恐れていたことが現実になったのを認めざるを得なかった。そして、息子の連れて来た犬の事件 (C-Y, p. 74) 以来、ハーキュリーズと妻の幸せな生活は崩壊への道をたどり始めるのである。特に、友人と共に帰国した息子の家の中での乱暴狼藉ぶりや、侏儒の執事に酔っぱらうまで酒を飲ませ、食卓の上で踊らせ、その滑稽な姿に打ち興ずる彼らの哄笑と罵声を見聞きするハーキュリーズの姿は、実にあわれでたましい。翌日になれば今度は、自分と妻が愚弄される番だと知り、妻の “I do not want to see tomorrow” (C-Y, p. 76) という言葉を聞きハーキュリーズは、ついに死を決意する。このように、幸福への第一歩にみえた結婚が、実は苦しみと絶望への第一歩であった事を Huxley は示しているのである。

ハーキュリーズの苦悩ぶりを、諷刺家 Huxley の眼は冷静かつ皮肉にとらえていく。まず、家の中での大騒ぎぶりと執事が翻弄される様子をそっとみるハーキュリーズの姿を、Huxley は、 “Standing on tiptoe, he [Sir Hercules] managed to look through the keyhole” (C-Y, p. 76) と描写している。ハーキュリーズが騒ぎの様子を見るためには、つま先立ちしなければ鍵穴に背がとどかない事を Huxley は鋭く見抜き指摘することを忘れてはいないのである。さらに、ハーキュリーズの苦悩にとどめをさすかのように、 “This was the end ; there was no place for him now in the world, no place for him and Ferdinando together” (C-Y, p. 77) と彼がすっかり周囲から孤立してしまった事を冷静に観察している。ハーキュリーズの苦悩と絶望が徐々にあかさされていくにつれて、読者は全て自分の体に合わせて造りかえたハーキュリーズの家屋敷、言い換えれば、彼だけの世界の事を Huxley が “paradise” (C-Y, p. 70) と呼んでいた事を思い出し、この “paradise” という言葉の背後に Huxley の痛烈な皮肉が潜んでいる事に気が付くのである。

また、死を決意したハーキュリーズに対して Huxley は、もう一度打撃を与えている。それは、ハーキュリーズが、ローマの歴史家スエトニウスの「十二人のローマ皇帝伝」を取り出す場面 (C-Y, p. 77) である。パラパラと “at random” (C-Y, p. 77) にページを繰っているハーキュリーズの目に突然飛びこんできた記述は、 “. . . dwarfs . . . he hold in abhorance as being *lusus naturæ* and of evil omen” (C-Y, p. 77) というものであった。その時のハーキュリーズの様子を Huxley は “He [Sir Hercules] winced as though he had been stuck” (C-Y, p. 77) と観察している。ハーキュリーズは何気なく、ページを開けたにすぎないのである。愛する妻にも致死量に相当する睡眠薬を与え、自らも死の直前にあるハーキュリーズにとって、その死の原因となった肉体的欠陥を示す “dwarf” という言葉は、胸にぐさりとつきささるに十分な強烈な一撃であったに違いない。

英雄的最期を望んだハーキュリーズを、Huxley は鋭く諷刺している。ハーキュリーズ

は、自殺して果てたローマの政治家セネカ、同じく動脈を切断して自殺したネロ皇帝の側近ペトロニウスら古代の英雄たちの死の様子を本で調べた後、死を目にした日記の中に自分の最後を “He [Sir Hercules] died a Roman death” (C-Y, p. 78) と記している。この “Roman death” は英雄的死、自殺を暗示している¹⁰⁾。ギリシア神話の最大の英雄ヘラクレスと名前を共有するハーキュリーズは、英雄のようにその生涯を終ることを望んでいたと解釈できる。ここで我々は、ハーキュリーズがかつて作った詩を思い出す。その詩によると、人類は頭がからっぽで身体ばかりが大きい巨人の時期から、現代の人間になり、さらに頭脳の面においては現代よりも優れているが身体は小さい侏儒の時期へと移っていくというのである。従って侏儒であるハーキュリーズは、その進化の過程を数歩先んじた存在であると、侏儒の “superiority” (C-Y, p. 73) に対して、絶対的自信をもっていたのである。ところが、Huxley は “Roman death” を望み “superiority” を誇っているハーキュリーズをあざ笑うかのように、彼の最期の様子を次のように描写している。

The blood oozed out, floating through the water in dissolving wreaths and spirals. In a little while the whole bath was tinged with pink. The color deepened ; Sir Hercules felt himself mastered by an invincible drowsiness ; he was sinking from vague dream to dream. Soon he was sound asleep. *There was not much blood in his small body.* (italics mine. C-Y, p. 78)

ここで、Oedipus が両目に刃を突きさす場面を思い起こす必要がある。Lewis Campbell の英訳によると、Oedipus が自らの目を突く場面は次のように描写されている。

The bleeding pupils moistened all his beard,
Nor stinted the dark flood, but all at once
The ruddy hail poured down in plenteous shower.¹¹⁾

この恐ろしく生々しい場面までくると、読者は真実を知り繁栄と権力から突然破壊と恥辱に投げ込まれた Oedipus に対して、深い同情と強い憐憫の情を感じないではられない。一方、ハーキュリーズの自殺の場面に関しては、最後の “There was not much blood in his small body” という一文¹²⁾がなければ、一応父親としての義務を息子とその友だちに果たし屈辱に耐え、ペロニウスの古事を真似て手首を切るという方法で死を選び、ついに力つきて倒れた英雄としての姿が読者の胸に焼きついたかもしれない。しかし、最後の一文は、生き恥をさらすことなく英雄らしく断固として死を選んだハーキュリーズが、小さな肉体をもった人間、即ち、侏儒である事を読者の胸に残す効果を果たし、同時に滑稽

さをも強調していると言える。Huxley は、ハーキュリーズの望んだ“Roman death”及び、彼の誇っていた“superiority”の二つを共に見事に否定し、ハーキュリーズを悲劇の英雄にはせず、揶揄の対象として扱っているのである。

以上から、Huxley は、その鋭い洞察力で注意深く刻明ではあるが、淡々と筆を進め極めて冷たく突き放した態度をとっている事、「死」というものに対して人間的感情をあまり感じさせず、非常に醒めた眼でみつめている事の二点が言えるのである。

次に、*Brave New World* を取り上げ、異端者であり次第に孤立していった John に焦点をあてる事にする。彼は、第7章になって始めて登場するが、*Brave New World* において彼の果たしている役割は非常に重要である。John の人生態度、言葉、愛、そして死の態度は、非常に英雄らしく見えるが、*Brave New World* における彼の立場は悲劇の英雄とは言い難いのである。従って諷刺小説 *Brave New World* に対する Huxley の態度を明確にするためには、John を議論の対象にする事は、極めて適切であると考えられる。John は、「野蛮人保護地域」から「新世界・ロンドン」にやって来たことが、自分の苦しみの始まりである事に気が付いていない。Bernard から、ロンドン行きを誘われた時の John の反応は次のように描かれている。

The young man's face lit up. "Do you really mean it?"

. . . "To think it should be coming true — what I've dreamt of all my life" his eyes shone, his face was brightly flushed. (*B-N-W*, p. 113)

彼は長年の夢がかない、有頂天になりすっかり興奮している。ところで、Richard B. Sewall は、*The Vision of Tragedy* の中で、悲劇の英雄の歩む道の一つは苦悩の道であり、その苦悩はある行動を起こすことによって始まり、さらにこの行動は選択によると主張している⁽¹⁴⁾。従って、選択しなければ苦悩は始まらない訳である。Sewall は、また、悲劇の英雄とはある意味で自分のしている事が間違っていると知っていながらも行動し、そして苦しむものであるとも述べている⁽¹⁵⁾。John の場合は無理やりロンドンに連れてこられたのではなく、彼自身の意志でやって来た事は明白である。しかしながら、彼は少しもためらうことなくその申し出を受諾し、ロンドン行きが苦悩への道になろうとは夢にも思っていないのである。この事は彼の喜びぶりからも容易に判断できる。彼のこの選択が彼の苦悩の始まりである事を知っている読者には、この John のはしゃぎ、喜ぶ姿は滑稽に写るのである。

John の Lenina に対するひたむきさは、Huxley にとって諷刺の対象になっている。悲劇の英雄とは、ある意味で自分のしている事が間違いだと知りつつも目的を一貫して追

求し行きつくところまでいった人物である。⁹⁶ 例えば、自分の過去を最後まで突きとめようと決心しその目的に向って一直線につき進んでいった Oedipus や、一度疑い出したらとことん妻を疑っていった Othello といった英雄の中に、ある意味でのひたむきさを見るのである。そして、その目的に到達した後の苦しみに耐える姿に読者は胸を打たれる。悲劇の英雄のもっている資質の一つがひたむきさであることを念頭において、John の Lenina に対する行動を見る時、彼女への愛にはひたむきさがあることは否定できない。John は、「野蛮人保護地域」で始めて Lenina を見て以来、その美しさにひかれ彼女が結婚していない事を知ると単純に喜び、ロンドン行きを決めている。ロンドンに来て John の彼女に対する思いはますますつり、彼女を Juliet や Desdemona といった貞淑な女性にたとえ理想化している。この John の態度は実に一途であると言える。しかしながら皮肉な事に、新世界の住人である Lenina には John のひたむきさは全く理解できないのである。例えば、新世界流のやり方で John を誘惑する Lenina に接した時、John は彼女に向って“Damned whore . . . get out of my sight or I’ll kill you” (B-N-W, p. 154) とおこって叫ぶのであるが、Lenina にはこの“whore”という言葉の意味はもとより、何故 John がそれほど激しく気狂いのようにわめき散らしているのかが全く分からないといった区合である。新世界における John のひたむきさを Huxley は、滑稽な程場違いであり不適切なものとして描いている。John は悲劇の英雄の資質の一つであるひたむきさを有してはいるが、新世界の女性 Lenina の前では滑稽な道化でしかないことを Huxley は読者に暴露している。

John は孤立への道⁹⁷を歩んでいるが、悲劇の英雄にはなり得ない。新世界に来て以来数々の異常な経験を積んだ John は、母親の死という彼にとって最大の悲しみに直面している。ここから彼の苦しみ、孤独が始まっている。母親の最後をみとどけた後、病院の庭で頼る人もなく独り黙って座り、母の思い出にふける John の姿、母親を騒々しい人々の嫌悪と嘲笑の中で死なせてしまった事を悲しむ姿、さらに彼女のこのような最期は新世界に連れて来た自分の責任だと後悔している様子には、孤独の影がつきまとっている。そして John は結果的に母の命を縮めたのはソーマという薬だという事を改めて認識し、新世界の人々にソーマを手にしないうと教えることが自分の使命だと考え、立ち上るのである。ソーマ配給の日、薬を求めて騒ぐ新世界の人々に対して、John はソーマに頼らないように説得を試みている。

“Listen, I beg you,” cried the Savage [John] earnestly. “Lend me your ears . . .” “. . . Don’t take that horrible stuff. It’s poison, it’s poison . . .”

“Poison to soul as well as body . . .”

“Throw it all away, that horrible poison . . .”

“I come to bring you freedom,” said the Savage . . . (B-N-W, p.167)

John は、ソーマを止めさせようと一人で必死になって力の及ぶ限り戦っている。しかし人々は彼を全く無視している。そこで John は今度は、たった一人で総統 Mustapha Mond と対決しようとする。苦しみ、恐れ、怒りといった諸感情は全てソーマが解決してくれる事を誇りに思っている総統に対して、“I’m claiming the right to be unhappy” (B-N-W, p.187) と、恐れ、苦しみといったあらゆる感情を望むと宣言する John の態度には、世間を敵に回すことも、いとわないといった気魄が窺われる。John は、周囲との連帯を失いますます孤立していく。しかし、二人の意見が全くかみ合わない事を悟った John の次にとった行動は、もはや戦うことではなく、新世界からどこかに行ってしまうことであった。悲劇の英雄とは何時幾何なる時でも、たとえ周囲から孤立しようとも決して諦めないものである。悲劇の英雄は妥協、諦めといったものを一切拒否する。妥協したり諦めたりした瞬間に英雄としての資格を失うのである。従って、John は総統との対決後ロンドンを離れ郊外に居を移そうとした時点において、悲劇の英雄の位置から一步遠のいたと言える。

John のロンドン郊外での生活とそれに続く自殺は、¹⁸ 逃避であると考えられる。悲劇の英雄とは目的に向って一直線につき進んでいく人物をいうのであり、Sewall によると、悲劇の英雄以外の人間というのは受動的にとどまるか、¹⁹ 逃避するものなのである。ここで、John の最後の行動を見ると新世界の考えを受け入れてそこにとどまり生きていく意志のないことは明白である。しかし、新世界を向こうに回して、敢然と戦いを挑む気もちがないことも、また明らかである。そこで彼は、新世界を離れロンドン郊外に行き、文明に汚された身を浄化しようと自らの体に鞭打っている。Lenina に対する煩悩に苦しみ、そのおかげをふり払おうと激しく鞭打つ John の姿は実にいたましい限りである。その John をさらに追いつめる出来事が起きる。即ち、彼の鞭打ちの光景をみようとして新世界の人々が集まってきたのである。はやしたてながら John の鞭打つ姿を見物する人々の無遠慮な態度と好奇の目は、John を絶望に一步近づけるのである。そして、とうとうソーマのガスを吹わされ眠っている間にさえも、もはや誘惑者の悪魔にしか見えないはずの Lenina の官能的な夢をみてしまった John は、文明の地を離れ原始的な生活を始めても、一たん入りこんだ文明の毒は容易に体から脱けない事を知り、愕然とし激しい自己嫌悪に襲われる。もはや彼には、これらに耐えるだけの強靱さはない。²⁰ 彼に残された道は唯一つ死だけであった。彼は耐え切れなくなり絶望的な気持ちから死を選んだと言える。

John は悲劇の英雄の諸要素を有し英雄の如く行動しているが、結果として悲劇の英雄にはなっていない。英雄とは普通の人間から見ると、多少の差はあるにせよ気狂いのように見えるものである。いわゆる常規を逸している訳である。常規とは、社会あるいは個人

にとって最も安全とされている道のことである。John は安定と幸福が信条の新世界にとどまる事を拒否し、ロンドン郊外での原始の生活に戻り、鞭打ちという体をいためつける方法をとっている。この事は、回りの人間から見れば気狂いと思われなかったのである。従って彼が悲劇の英雄に見えるのも無理からぬ事であろう。しかしながら、Lenina に対する場違いなひたむきさは滑稽であるし、あっさり文明相手の戦いを止める彼には失望を禁じ得ない。そして最後に死を選んだ John の中には、力の限り戦い、いきつくところまで行ってついに倒れたという悲劇の英雄の姿はないのである。さらに作品の終わりで主人公が敗北——多くの場合は主人公の死を意味する——するというのは、悲劇、諷刺文学に共通のものであるが、異なるところは悲劇においてはその敗北の中に何かを見出す²¹ということであると言われているが、死の直前 John を襲ったものは激しい自己嫌悪以外の何ものでもなかったのである。Huxley は John に死の直前何かを得させはしな²²かったのである。Huxley は John を悲劇の英雄として死なせな²³かったと言えるのである。

以上見てきたことから、Huxley の作品が悲劇ではなく諷刺の分野に属することは、明白になったと考えられる。Sewall は、悲劇において全ての人は苦悩する人物と同じように感じなければならないと述べている²³。人間は誰もが悲劇の主人公になる可能性を内に秘めていると言えよう。故に悲劇に接すると、読者はその主人公に共感、同化融合し、苦悩する主人公に対して深い悲しみと憐憫の情を感じずにはいられないのである。一方 Huxley の読者は、彼の描く主人公——ハーキュリーズや John ——の苦しみを読者自身の苦しみとして感じることはない。Huxley のハーキュリーズや John の描写は、我々に我々が悲劇の時に感じるような感情を呼びおこさない。我々は、悲劇の時に感じる共感、憐憫の情とは異質のもの、即ち滑稽さを強く感じるのである。それは Huxley の冷静で突き放した姿勢によると言える。一段上、あるいは一步退いたところから眺める態度である。苦しみそして絶望の内に死んでいく主人公を描く時でさえ、その態度は変わらず諷刺の筆は衰えていない。Huxley の描く主人公の行動は読者にとって、他人事のように写る。従って読者は Huxley の作品に接した時、主人公を取り巻く出来事は隣りに人に起こるかもしれない出来事であることは認めても、決して読者自身の身の上にはふりかかってこない²⁴と考えるのである。即ち、読者と Huxley の主人公との間には距離感が存在していると考えられる。先の Sewall は偉大な悲劇作品には作家自身が作品に参加している感、いわゆる直接性があると述べているが、Huxley の場合は、彼のその冷静な観察力を考えると直接性というよりもむしろ、間接性、言い換えれば、傍観者としての立場をとっていると²⁵言える。Huxley の作品が諷刺作品と言われている理由も実は、この傍観者としての立場によるのである。この態度こそが、彼の作品を鋭い諷刺にあふれた作品と言わしめ、彼の諷刺作家としての地位を不動のものにしたのである。

NOTES

- (1) Peter Fichow は, *Aldous Huxley: Satirist and Novelist* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1972), p. 4 の序文の中で, これまで Aldous Huxley を, 諷刺作家として見なかった批評家は, ほとんどいないと述べている。
- (2) “Sir Hercules” というのは, Huxley 初期の作品 *Crome Yellow* 中の episode であるが, 後に短編集の中に “The Dwarfs” というタイトルで独立した一つの短編として収められており, *Crome Yellow* とは無関係に読むことが可能である。従って, 本稿において一短編として取り扱うことにする。
- (3) Keith May は, *Aldous Huxley* (London: Paul Elek Books. Ltd., 1972), p. 28 において, *Crome Yellow* の特色の一つは, アイロニーであり, その好例と言えるのがハーキュリーズの物語であると指摘している。
- (4) ギリシア神話に登場する Hercules (ヘラクレス) と, 短編の主人公 Hercules (ハーキュリーズ) との混同を避けるため, 以下カタカナで示すことにする。
- (5) 上田勤氏は, 「ハックスレイ研究」(東京, 英宝社, 1954) の中で, 主人公ハーキュリーズにギリシア神話の英雄の名を付けた事に関して, Huxley がハーキュリーズをかなり滑稽なものに感じていることの一例である, と指摘しておられる。
- (6) Aldous Huxley, *Crome Yellow* (Harmondsworth: Penguin Books, 1974), p. 67. 以下, *Crome Yellow* のテキストからの引用は, 本文中及び注の () に, C-Y の略号と共にそのページ数を示しておくことにする。
- (7) Huxley はハーキュリーズの体形について次のようにも描写している。“His head . . . was too big for his body” (C-Y, p. 67)
- (8) Robert C. Elliott は, *The Power of Satire: Magic, Ritual, Art* (Princeton, New Jersey: Princeton Univ. Press, 1972), p. 226 において, Wyndham Lewis の satire についての理論を, 次のように紹介している。“The medium of satire is laughter a bitter, cold, tragic laughter in accord with satire’s cruelty and its destructiveness”
- (9) William Shakespeare, *Othello* ed. M. R. Ridley (London: Methuen & Co. Ltd., 1979), Act I, Scene i, line 89, and Act III, Scene iii, line 29.
- (10) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Tokyo: Taishukan Publishing Company, 1984, p. 531.
- (11) Sophocles, *King Oedipus* translated by Lewis Campbell (Tokyo: Tsurumi Shoten, 1971), p. 55.
- (12) この一文が, Huxley の諷刺が如実に示されている箇所である事は, 何人かの批評家の指摘するところである。
- (13) Aldous Huxley, *Brave New World* (Harmondsworth: Penguin Books, 1976), p. 113. 以下, *Brave New World* のテキストからの引用は, 本文中の () に B-N-W の略号と共にそのページ数を示しておくことにする。
- (14) Richard B. Sewall, *The Vision of Tragedy* (New Haven and London: Yale University Press, 1980), p. 47.
- (15) Richard B. Sewall, p. 47.
- (16) Richard B. Sewall, p. 47.
- (17) 富原芳彰氏は, 「悲劇の諸相」(英語青年 117 巻第 6 号) の中で, 悲劇の主人公は孤立への道をその必然の道として歩むものである, と述べておられる。
- (18) Laurence Brander は, *Aldous Huxley: A Critical Study* (London: Rupert Hart-Davis, 1969), p. 66 の中で, John の自殺を “eseape of the creature” と述べている。

Aldous Huxley における悲劇と諷刺

- (19) Richard B. Sewall, p. 47.
- (20) Richard B. Sewall, p. 47.
- (21) Leonard Feinberg は, *Introduction to Satire* (Ames, Iowa : The Iowa State University Press, 1967), p. 59 の中で, 次のように述べている。“Tragedy, like satire, end in the protagonist’s defeat but tries to imply that somehow an inspirational value can be found in his failure”.
- (22) Keith May は, *Aldous Huxley* (注3参照), p.116 の中で次のように述べている。“In the last chapter of *Brave New World* Huxley has tilted the scales away from the side of tragedy without pushing them down on the side of comedy.”
- (23) Richard B. Sewall, p. 6.
- (24) Richard B. Sewall. p. 5.